

# うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵日より  
第3号  
2017(平成29)年3月26日  
(代表 梅田正之 090-5042-7775)

## 知らないことばかり — 木綿以前のこと —

「木綿が日本で普及するのは江戸時代に入ってから」。このことを初めて知ったときの驚きは忘れられません。「信じられない!」というのが正直な気持ちでした。

木綿以外の衣料素材としてすぐに思い浮かぶのは絹、そして麻です。しかし、絹や麻で織った衣類を日常的に庶民が身につけていたとはとても考えられません。絹や麻は非日常的で、木綿に比べて高価という印象があったからです。「では、いったい昔の日本人は何を身につけていたのだろう?」これが最初に思い浮かんだ疑問でした。

ところが、あらためて考えてみれば、私は絹について、麻について、いったいどれだけのことを正確に知っているかと言えば、実はほとんど何も知らないことに気づかされたのです。絹織物ができるまでの工程、麻織物ができるまでの工程、綿織物ができるまでの工程、それぞれに明らかな違いがあります。「絹は繭から」という程度であれば知識としては知っています。しかし、『女工哀史』という言葉とともに近代史で学んだ近代織機による過酷な労働環境はイメージできても、蚕を自宅で育て、繭から取り出した糸を手で紡ぎ(つむぎ)、機を織るまでの苦労は容易に想像することはできません。また、麻の繊維を1本1本つないでいく「績む(うむ)」という手作業がどれだけ熟練と時間を要するかも同じです。「紡績」とは、まさに糸を紡ぎ、糸を績むという作業から生まれた言葉ですが、それまで私は実は何も知らなかった、ということに気づかされました。

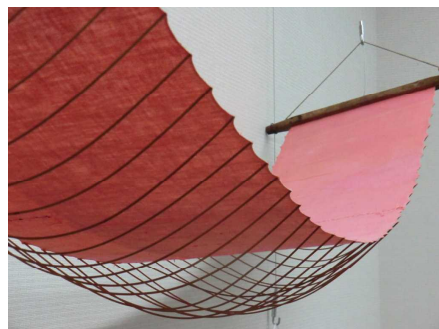
木綿が急速に普及する以前の日本人は、とくに一般の庶民はおもに麻をはじめとする植物繊維で織った衣類を身につけていました。「信じられない」というのは、ただ知らないだけの話です。

現在でも、たとえば京都の「丹後藤織り保存会」では、藤蔓の木の皮の繊維から機を織る技術を継承すべく、活動をつづけておられます(平成29年度も藤織講習会受講者を募集中)。

また、「実は何も知らない」ということで言えば、私には麻は「硬い」というイメージがありましたが、木綿がなかった時代にも、人々の生活の中には「柔らかい布」としての麻が存在していたらしいのです。これは麻布研究の第一人者、吉田真一郎さんがご自身の研究成果として指摘しておられます(近世麻布研究所、十日町博物館『四大麻布』より)。

「知る」ということは、ほんとうにおもしろいものだと、つくづくと感じるようになりました。最後に、もう一つ紹介させていただきます。日本人は、衣料素材としての綿を手にして、諸手を挙げて喜んだに違いないと思っていましたが、実はそうでもない一面があったようです。これは柳田国男が指摘しています。着心地から言えば麻の方が良かったはずなのに、木綿が庶民に、とくに女性に受け入れられた大きな理由の一つは、「何よりも女にうれしかったのは、衣装の輪郭の美しくなったこと」であるということです(『民間伝承』第7号附録 昭和 11年3月20日発行より)。

とにかく、知っているようで知らないことばかりです。まだまだこれからです。 写真は昔ながらの「伸子張り」: 織編館→



### ----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成29年2月26日～平成29年3月25日)

千葉県2、東京都1、神奈川県1、静岡県1、愛知県1、三重県1、京都府2、大阪府1、奈良県1、愛媛県1

【H.A.M.A.木綿庵】(平成29年2月26日～平成29年3月25日)

メールを含む各種相談件数2、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数2件4名



## 《綿の歴史》 — その2 中国、朝鮮を経て日本へー 木綿庵1号畑オリジナルパネルより

中国へは後漢時代の1世紀頃にインドから綿布がもたらされたことがわかっていますが、綿の種子が伝えられて栽培が行われるようになったのは10世紀になってからです。しかし、当初は観賞目的であり、衣料素材としての本格的な綿花栽培が行われるようになるのは南宋時代の12世紀になってからと考えられています。

朝鮮半島に綿の種子が伝えられたのは高麗時代の14世紀中頃です。その後、李朝時代になって産業政策の一環として綿作綿業が奨励され、15世紀から16世紀にかけて急速に普及していくようになります。やがて朝鮮木綿は対日輸出の最重要品目となり、その見返りとして日本からは胡椒や金、銀、銅、鉄などの鉱産物が輸出されるようになっていきました。

日本に初めて綿が伝来したのは平安時代の初め（8世紀末）とされています。その根拠は、『類聚国史』に見られる延暦18年（799年）7月の記述にあります。そこには「蛮船」が三河に漂着して綿種を伝え、その翌年に朝廷は綿の種子を紀伊などの国々に配り、試植させたことが記されています。しかし、このときに各地に植えられた綿の種子は定着することなく途絶えてしまいます。

その後、日本にあらためて綿が伝えられたのは室町時代になってからです。14世紀末以降に朝鮮半島から綿が伝えられると、それが衣料素材、とくに兵衣として抜群の性能を持つことが認識されるようになり需要が高まりました。応仁の乱（1467-1477年）はその状況に拍車をかけ、幕府をはじめ各地の戦国大名たちは競って朝鮮から木綿を輸入するようになりました。

こうした事情を背景に、国内で綿の栽培が本格的にはじまったのは15世紀末から16世紀中頃と考えられています。綿は兵衣にとどまらず一般民衆の衣料素材として人々に受け入れられ、急速に普及し、その需要の高まりが全国各地での綿作、綿業の展開へとつながっていきました。

---

### 【綿の加工の作業記録】（梅田1人の作業量）

・糸車を用いての糸紡ぎ量（洋綿）

2月25日～3月25日（作業実日数24日） 糸の総量133.7g（35.65匁） 総時間502分（8時間22分）

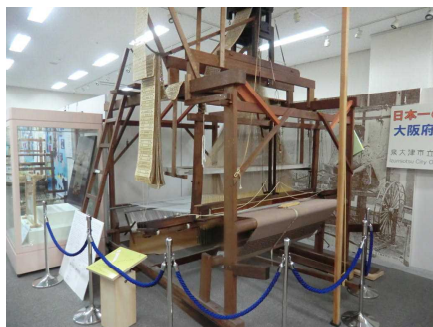
※1分間≒0.266g 1時間≒16g（4.3匁）

平成27年産の和綿の打ち綿がなくなったため、2月25日より洋綿を紡いでいます。ところが、ここでおもしろいことを発見しました。和綿の手紡ぎに慣れた手で、洋綿を紡ぐと、とても紡ぎにくいのです。一般的には紡績糸には繊維が長い洋綿が適していると言われていました。したがって、手紡ぎも洋綿の方が簡単だろうと思いこんでいました。実際に紡いでみると、洋綿は繊維が長いだけに絡みやすく、手先の微妙な調整が必要になるのです。「手紡ぎは和綿の方がやりやすい」は、私だけでしょうか。それともみなさん感じておられることでしょうか。とても気になっています。

### 【研修等の記録】

- ・平成29年3月 4日「葛城市歴史博物館」（奈良県葛城市忍海）の特別展『大和絣展』を見学
- ・平成29年3月 5日「和泉大津市立織編館」（大阪府泉大津市旭町）を訪問、見学。
- ・平成29年3月11日「葛城市歴史博物館」での講演会「大和絣について」を聴講

### 【以下の写真は、泉大津市立織編館の織機】



大型のジャカード織機



模様を指示するパンチカード



シャトルが手動で移動する綿織機